

～第13回 ホスピス祭りのプレゼント～

人とひとの和が大きなエネルギーとなって

地域に根差す医療を そして “笑顔で築くふれあいの和”をキャッチフレーズに「輝け！いのち」をテーマのもとに 人のいのちに寄り添う医療を目指す医療法人どちペインクリニックの“第13回ホスピス祭り”が5月24日に盛大に行われました。毎年遠近各地よりこの日のために駆けつけてボランティアして下さった方々、尊い品々をご提供して下さった方々、当日会場へお越しく下さった方々、演奏や演技して下さった方々、通院治療等でご縁を頂いた方々やそのご家族の皆様 その他ありとあらゆる形で このいのちの輝きを求める「ホスピス祭り」に大勢の方々の心温まるご支援ご協力を頂きましたことを心から御礼申し上げます。

おかげさまで 第13回のホスピス祭りも多くの人とひとの心の和がお互いに結び合っ大きな輪となって 有意義なお祭りを盛り上げてくれました。第1回目から数えて13回という尊い歴史を持てることに誇りを持つとともに ここまでご支援くださった皆様に感謝の思いでいっぱいです。

いま 市民にとって いのちとは？ 生きるとは？ 特に終末期の医療でいのちに寄り添うとは？ という具体的な問題点がこのお祭りを進めていながら お互いに少しずつ見えてきたと思います。

お祭りというのは そのものになる魂のエネルギーをつかんで輝くことだろうと思います。大勢の方々のご支援ご協力の様子がそれを物語っております。

私たち「医療法人どちペインクリニックのホスピスを支援する市民の会」はさらにクリニックの日常の医療業務で その尊いいのちの生きる輝きの哲学が発揮できるよう今まで以上に支援活動を進めてまいりますので これからも皆様方の尊いご支援ご協力をお願い申し上げます。第13回ホスピス祭りの御礼といたします。ありがとうございました。

医療法人どちペインクリニックのホスピスを支援する市民の会

代表 吉田 永正



第13回 DPCホスピス祭り

★輝け！いのち★笑顔で築くふれあいの和★





今回のお祭りの収益金よりカンボジア支援へ15万円を寄付させていただくことが出来ました。ご支援ご協力ありがとうございました。

カンボジアでの自立支援活動を通じ、子供たちの未来を語る岩田さん。子供たちの未来に向けたメッセージを伝えていただきました。



いわた りょうこ
岩田 亮子さん

カンボジア、バタンバン州
児童養護施設 “Hope Of Children”
自立支援員

5月24日は、年に一度の「ホスピス祭り」に御招待頂き、本当にありがとうございました。

その上、貴重な売り上げの中から、思いもかけぬご寄付まで頂き、“Hope Of Children”の子ども達に成り代わり、心よりお礼申し上げます。頂いたご寄付は、医療事情の悪い当地での医療費及び病院への移送費などに充てたいと思います。有難く大切に使用させていただきます。

当日はアルプスに抱かれた風光明媚な土地で、心温かい人々の心の交流を垣間見させて頂きましたが、何だか昔から知っている友人、知人のような錯覚に陥り、何の抵抗もなく溶け込ませて頂いたのも、普段の皆様の懐の深さ、広さから来るものなのだと、改めて玉穂ふれあい診療所の魂を感じさせて頂いております。今の日本人がともすれば忘れがちな大事な魂が、そこには宿っているように感じ、とてもとても嬉しく居心地の良い心温まる時間でした。

それは、まるで私がここカンボジアで感じているのと同じ種類の居心地の良さでもありました。頂いた命に魂を吹き込み、命を輝かせ、人の命も慈しみつつ生きて行くことをまた教えて頂いた思いです。

ここカンボジアにも命を輝かせる子ども達が沢山います。宜しかったら、かわいいこのアジアの同胞に是非逢いにいらして下さい！

最後になりましたが、この度の機会を与えて下さったDPCホスピスを支援する市民の会の皆様に心より感謝申し上げます。



カンボジアの現状について講演する岩田さん

～参加者の声～

講演では、戦争の傷跡でカンボジアの子どもたちは親のいない子供が多く、人身売買の深刻な問題が起きている。また、衛生面でも飲める水がない場所や、不衛生な環境の中、病気になっても薬がないそのような環境の中で生活を今も尚送っている現実を知り、命のこと、人権について深く考えさせられました。講演の最中ホープオブチルドレンの子どもたちとインターネットで中継し、交流を持ちました。辛い環境の中でも、笑顔あふれる子どもたちの姿に自然と涙がこみ上げてきました。岩田さんは言います「思い願うことは大切であるが、行動することで何かが変わって行くと思います。皆さんどんなことでも夢に向かい行動して下さい」と。小さな行動から何かが生まれる岩田さんの行動はこれから生きる子どもたちの未来を切り開いているのだと思いました。岩田さんの活動をこれからも応援していきたいと心に強く感じました。

東日本大震災で学んだ防災教育を次世代の子どもたちに、 災害が起きる前に僕たちができる事。

ボウサイダーの活動は、「大きな地震が来たら、先ずは自らの意志で高いところに逃げる」避難行動の大切さを伝える“津波てんでんこ”の教えを、人口の多い沿岸エリアで「災害時、子ども死者ゼロ」を実現するため、エンターテインメント型啓発で地域を巻き込む防災教育推進チャレンジです。子ども向け防災コンテンツ(教材作り)と、避難訓練付きイベント運営(野外授業)の2つの活動を自主収益事業の「鎌倉戦隊ボウサイダー！飲料」の売上で賄っています。子ども達に大人気のボウサイダーは地域の防災シンボルとして愛されています。



かわしま ゆうが
川島 勇我さん
ボウサイダー 代表



すがわら けんすけ
菅原 健介さん
絆の会 代表

湘南から『絆の会』の有志で『東北物産展』、そして今年からは『ボウサイダー』の仲間も一緒に参加させていただき、ありがとうございました！命輝く地域へ、これからもよろしくお祈いします！



～参加者の声～

菅原健介さんとの出会いは東日本大震災の被災地支援でした。その出会いをきっかけにホスピス祭りにて東北物産展を行って来ています。東北物産展は、風評被害で売上が低下した東北物産を買い取り、東北物産展を各地で販売し東北の復興を応援している活動です。ホスピス祭りでは、震災後今年で4年目の出店の常連です。今年はボウサイダーとのコラボレーション。ボウサイダーは災害が起きる前に出来ることを考え音楽と身体活動で誰でも学べるボウサイダー体操や防災クイズを考え活動している。彼らはとにかく明るい、一緒にいるだけでワクワクする。そして、何事にも真剣そして楽しんでいる。まさに『輝けいのち！』です。

参加者の声

【ボランティア編】

県内外から、参加された多くの力に支えられホス

今回、ホスピス祭りに参加させて頂きました。参加された皆さんの素敵な笑顔で、私も元気をもらった1日でした。初めて食べた大根餅もとても美味しかったです。私は将来、地域医療の現場で働きたいと考えております。「その人らしさ」を大切に考え、サポートしているスタッフの皆さんとの触れ合いの中でその思いは強くなりました。これからも一生懸命学び、皆さんのお役にたてるような看護師になれるよう努力していきたいです。



ふじまき みさき
藤巻 美紗希さん
山梨県在住



ふるかわ まさみつ
古川 正光さん
山梨県在住

職員はじめ多くの関係者の努力に加え、祭りの日時にあわせて多くのボランティアの方々が集まる結集力、それぞれが自分のポジションの役割を理解し一生懸命に行動している姿やバザーの品々の寄付に多くの方が協力してくださることに感銘を受けました。また、この職員、関係者、ボランティアの3者の協力関係が一つでも欠けていても、今回のお祭りの盛況はなかったのかもしれませんが。これからも多くの方が同じような協力をしてくださることを願っています。このお祭りにちょっと関わって感じた一言です。最後にこのホスピス祭りが長く続き、また更なる発展を祈っています。

他県から突然参加した私を、皆さんが、笑顔で暖かく迎えてくださいました。そして、すぐに、まるで昔から近所に住んでいたかのように、私は安心してそこに居る自分を感じました。これですね、DPCの魅力は！ 誠実に、人の想いを大切に、皆で作りに上げている、医療、イベント。ホスピス祭り、楽しかった！ 一度参加すると、また触れたい、行きたくなる、そんな場所です。ここで出会った皆さんとのご縁も大切な宝物です。また来年も参加します！



こだま ゆきこ
児玉 由紀子さん
三重県在住

ボランティアさんの感想です。 ピス祭りは大成功を治めました。



みつた **光田** なおゆき **直之さん**
みつた **光田** みつこ **美津子さん**
埼玉県在住

私がここに参加させていただいたきっかけは、自分が乳がんになり退院後にたまたまテレビ番組を見たことでした。

自らもがんを抱えながら患者さんに寄り添う玉穂ふれあい診療所看護職員の姿を紹介していました。「仲間だから」という言葉に患者さんの表情が明るくなりました。「心が痛い」「心を救ってあげたい」という言葉が心に残りました。その後、嵐の桜井翔さんがクリニックを紹介する特集を見ました。土地院長が患者さんの話に「うんうん」とうなづきながら傾聴され心のこもった言葉をかけられていました。

「こんなに素晴らしいクリニックが！」と驚きました。ホームページで「ホスピス祭りボランティア募集」を見つけ、すぐに電話をかけました。

山梨県は亡き義母の故郷であり、結婚後しょっちゅう連れて行ってもらううちに大好きになった場所で不思議なご縁を感じました。職員の方達の温かさに触れ感動しました。

帰宅後、心のこもった「おもてなし」にしばらく興奮状態が続いた程です。そして、今回は主人も誘って2人で参加しました。前日準備の後、誘っていただいた会で「寄り添い」について貴重なお話を伺うことができました。吉田永正御住職が「その人の思いに100%添うこと」土地先生が「こうしようと思った瞬間に師長が動いてる」と。「言葉に出さなくてもですか？」と聞くと、ニコニコしながら「以心伝心」と仰いました。以前組織の壁にぶつかり、患者さんより病院の都合重視に本来の看護をすることが出来なかったことが悔やまれました。がん患者になり、これまで患者さんを正面からしか見ていなかったのが、隣りに並んで見るとたくさんの方が見えるようになり、これからは少しでもがん患者さんに寄り添いたいと動き始めました。皆さまに出逢えたことに感謝申し上げます。又来年を楽しみにしています。



理事長あいさつ

日本人の死について

1992年に開業医となり在宅緩和ケアをはじめた頃、「緩和ケア」は特別なものという意識がありました。「がん末期の患者さんには、特別に配慮された医療が必要だ」というような意識です。当時は、がんの痛みをコントロールする方法が乏しく、モルヒネ末をワインに溶かしたブロンプトンカクテルなども使いました。自宅で最期を迎えるためには、大変な努力が必要だったのです。

しかし最近、麻薬にも飲み薬や貼り薬など様々な薬が準備され、がん末期に痛みで苦しむ必要がなくなりました。「がん」も「老衰」も大した違いはなくなってきたわけです。

死にゆく人は、癌であれ、老衰であれ、特に変わりがあるわけではありません。結局、「死ぬ」のですから。そして、死は万人に訪れるものですから。

そろそろはじまった高齢化社会では、孤立した高齢者が増えます。「家族がいない」「家族がいても遠隔地で面倒を見られない」あなたはどうですか。

老年期の方々は「認知症が怖い」と言います。「何も判らなくなっても、ただ生かされているのが怖い」と。そして、「尊厳死」の話題になります。

人の命は尊いものです。その尊い命を全うしたい。そのためには自分の死をしっかりと考えたいものです。それは自分の生を考えることでもあります。

そして、戦争による死は絶対にあってはなりません。戦後70年、日本の不戦の歩みは正しかったと思います。戦死者が一人もいないのですから。

2015年7月

医療法人どちペインクリニック
理事長 土地邦彦



新入職員の紹介

診療所に新しい仲間が加わりました。右側から社会福祉士の野矢由香（地域連携室勤務）と看護師の伊藤裕子（病棟勤務）です。

皆さんどうぞよろしく申し上げます。



編集後記

ホスピス祭りも今年で13回目となりました。回を重ねるごとに参加して下さる方が増え、今回もたくさんの笑顔が溢れるステキなお祭りになりました。これからもよろしく申し上げます。